

樋口琢堂と「一日一善」

藤田和敏

はじめに

- ・和敬学園：社会福祉法人衆善会が運営する児童養護施設。定員60名。相国寺塔頭慈雲院に隣接して存在する。理事6名中には慈雲院住職と相国寺派教学部長が入る。
- ・創立は大正13年（1924）。慈雲庵（昭和15年〈1940〉4月1日施行の宗教団体法を契機として同17年4月に寺名を「慈雲院」に変更、『衆』S17/04）住職樋口琢堂（写真1）が園長を務める。創立以来、相国寺との密接な関係の中で運営された。
- ・本講演会の目的：樋口琢堂と和敬学園を通じて、大正～昭和戦前期における伝統仏教教団の社会活動について、その特徴を捉える。
- ・琢堂は、「一日一善」活動（詳細は後述）を提唱して衆善会を組織した。
- ・「諸悪莫作衆善奉行」：中国唐の時代、参禅した白楽天に仏法の大意を尋ねられた道林禅師の回答⇒「一日一善」活動は仏教の教理を踏まえたものであった。
- ・大正6年に機関誌『衆善』を創刊（写真2）。和敬学園創設後は学園の動静も掲載された。月刊発行し、昭和18年に終刊。317号に及んだ。
- ・仏教界の業界紙『中外日報』を題材とし、仏教界全体の動向も合わせて検討する。『中外日報』は、前身である『教学報知』が明治30年10月1日に創刊されて以来、現在まで刊行されている。

1. 衆善会創設までの樋口琢堂の経歴

- 1) 明治45年（1912）7月12日に作成された「履歴書」（相国寺文書「住職」写真3）：氏名は「服部琢堂」、本貫は名古屋市西区菊井町服部芳太郎附籍。
 - ・明治31年4月7日に慈照寺住職宮崎梅芳に就き得度。明治30年9月より宮崎に内外典を学ぶ。明治35年より同38年まで聯合般若林で修学。同40年より同42年まで円覚寺専門道場掛錫、宮路宗海に参禅。同年より同43年まで相国寺派鹿児島県南州寺で荻野拙叟に参禅。
- 2) 相国寺文書「教務綜」：大正5年（1916）に妙心寺派布教講習を修了。大正6年に布教使として第三教区三重県浄明院などを巡教、「樋口」姓に改称している。
- 3) 『万年山聯芳録』：明治19年（1886）12月生。「勢州四日市人、樋口氏」とあり、上記の記述と齟齬する。
- 4) 樋口琢堂『追想 病床に於て』（昭和32年〈1957〉、写真4）：「伊勢四日市に二倉持ちの家に生れ、父の失敗にて親子七人離散生活の憂き目に逢い、六歳の時、弟と共に叔父方に厄介になり育てられました」⇒服部姓は叔父方の姓。
 - ・「幸い本師梅芳和尚の初弟子であり、大変温情に富み他から羨まれる程の慈愛に接しました」、「修行中計らずも肋膜炎に罹り、（中略）鹿児島南州寺伊東師の処へ補佐の傍ら暖国の空気を吸うよう勧められました」
⇒宮崎（『聯芳録』では「岡本」）梅芳の愛情を受けた。蒲柳の質。
- ・明治45年7月21日、慈雲庵住職就任。「大正四年十一月、御大典に際し拙衲はまだ銀閣寺の小僧でしたが、当時皇太子であられた大正天皇が、銀閣寺に御成りになり御案内申

上げましたところ、種々我身の事について御下問あり、最後に「善い坊さんになれよ」
との御言葉と玉手が、子供心に感銘しました事は後々まで永く拙衲の鞭撻となりました」
⇒大正4年は琢堂29歳。『衆善』創刊号では、大正天皇が皇太子であった明治31年10月4
日に銀閣寺へ行幸したとあるので記憶違い。大正天皇との関係が社会事業に奉仕する
契機になっていることは重要。

- ・「偶々^{たまたま}当時広島県出身で、一日一善を唱導し明治神宮外苑の青年会館設立発起の先覚者
山本滝之助氏と意を同じうして、道林^{ひろ}禪師と白楽天の因縁を引いて衆善会を組織し、一
日一善を世上に汎^{ひろ}めることにし、念願の一端を実行に移しました」
⇒山本滝之助との出会いが衆善会の創設へと結び着いた。

2. 山本滝之助の社会教育活動

1) 青年団の祖、山本滝之助（写真5）【日本青年館1970・平山1978・長1991・多仁2011】

- ・明治6年（1873）、広島県沼隈郡千年村草深生。草深尋常小学校中等科卒業後、家庭の
事情で中学進学や上京の望みを断たれ、戸長役場職員・尋常小学校の準教員などを務め
た。明治38年（1905）に千年村常石尋常小学校長、同44年に郡立実業補習学校長に就任。
地方にあって青少年に対する社会教育に尽力した。
⇒山本の活動で特筆されるのは、青年団の育成とその全国組織化である。一つの地域を
範囲とする青年集団は、明治期には青年会と呼ばれる場合が多く、明治13年に設立さ
れたキリスト教青年会が名称の由来になっている。明治中期以降に全国各地で青年会
が組織されるが、当初は農事改良などを学ぶ学習会としての性格が強かった。
- ・青年会の前身は、江戸時代に全国の村落に存在した若者組である。若者組は、村落の共
同体的機能を担うとともに若年者を一人前に育てる機能を果たしていたが、明治以降は
喫煙・飲酒などの悪習を身に付けさせるものとして非難の対象になった。
- ・山本は、居村の千年村において若者組を改革した青年会を組織するとともに、明治29年
（1896）に『田舎青年』を自費出版し、①「田舎」こそが国家の根幹であり、青年会活
動において自己変革を遂げた「田舎青年」が国家の担い手としての役割を果たすべきこ
と、②個々の青年会が自律性を前提に連合し、相互に研鑽すべきことを提唱した。
- ・日露戦争の開戦（明治37年2月）とともに青年団体の銃後運動が活発化し、政府官僚が
その動きに着目するようになった。明治38年4月、戦時下の西日本2府15県を視察中の芳
川顕正内務大臣が広島県を訪れた際に、『田舎青年』などの著作で既に名を知られてい
た山本は、芳川に同行していた井上友一書記官に青年会の実情を報告した。
- ・その後の山本は、青年会への理解を求めるべく政府要人との面会や各種会合の出席を精
力的に行った。明治38年に東京で開催された第5回全国連合教育会において小学校の準
教員という立場で代議員として出席し、青年会活動の意義を訴えた。山本は、文部省・
内務省の青年団体政策に大きな影響を及ぼし始めたのである。

2) 地方改良運動と山本滝之助【宮地1973】

- ・小学校の準教員に過ぎない山本が国策に深く関わることになった理由
→日露戦争後の国内情勢＝獲得した海外の広大な植民地を経営する必要性が生じるとと
もに、莫大な戦費（約17億円）を賄うための大幅な租税の増徴が行われた。政府は、
国家体制の全面的な再編成に迫られた。

- ・政府は、国民が強固な国家意識を持ち、協同一致して国家を支えていくことを可能とする物質的・精神的基盤を創り出す政策を開始した⇒地方改良運動
- ・明治41年10月13日、明治天皇は戊申詔書（＝地方改良運動の基本方針、写真6）を渙発する。「戦後日尚^{なお}浅く、庶世^{しよせい}益々更張を要す。宜^{よろし}く上下心を一にし、忠実業に服し、勤儉^{こけん}産を治め、惟れ信、惟れ義、醇厚俗を成し、華を去り実^{いまし}に就き、荒怠^{じきよう}相誠め、自疆^や息まさるへし」
⇒天皇が全国民に対して勤儉と協同一致の態度で国家の政策に協力するよう求めた。
- ・戦前の国家における天皇と国民の関係＝明治23年教育勅語。万世一系の皇統を継承する天皇に対して、臣民は心を一つにして忠孝を尽くさなければならない。
- ・戊申詔書の精神を国民に浸透させるため様々な施策が実施された。それは、全国の町村に納税組合を設立させて「自発性」をもって租税義務を果たさせることなどに代表されるが、そのような国家に奉仕する国民の「自発性」を涵養するためには、小学校や青年会などを通じた国民教育が重要になった。
- ・明治40年の小学校令改正により、尋常小学校就学期間は4年から6年に延長された。卒業後は夜学会などで補習教育が行われる。
⇒新たな国民教育にとって、江戸時代以来の慣習を引き継ぐ若者組・若衆組は障害物以外の何物でもなかった。山本の活動は、若者組・若衆組の悪しき「旧弊」を否定し、国家が要求する諸事業の担い手としての青少年を作り出すことを目的としていた。

3. 「一日一善」と『衆善』の創刊

1) 山本滝之助『一日一善』

- ・『追想 病床に於て』：「山本滝之助氏と意を同じうして、（中略）一日一善を世上^{ひろ}に汎めることにし」。衆善会の「一日一善」は山本の影響を受けている。
- ・山本は明治44年（1911）に沼隈郡立実業補習学校長に就任。実業補習学校は独自の校舎を持たず、小学校を夜間巡回して授業が行われた。一町村につき一年に一週間の受講しかできず、生徒とは巡回日記などで連絡を取っていた。そのような教育方法が発展し、青少年が主体的に修養に取り組むためのテキストとして大正2年（1913）12月に出版されたのが『一日一善』である【多仁2011】。
- ・『一日一善』冒頭の文章（写真7）：「「一日一善」というのは、日々他人に対し世の中に對し必らず一つ宛^{すつ}の善い事をしよう」
⇒誰でもできる平易な修養の方法として『国民新聞』等に取り上げられ、広く世間から注目された。
- ・山本は、イギリスの少年義勇団（ボーイスカウト）の掟に「一日一善」があり、それが明治末年に日本に伝わったと述べている。また、「一日一善日記」を付けて「一日一善」を励行することが勧められた。

2) 『衆善』創刊号

- ・『追想 病床に於て』：『衆善』創刊の経緯。「貧弱な生活の中から節約して一ヶ月記載出来る一日一善用紙を二万五千枚随所に施配しましたところ、鐘紡京都支店を始め諸所より美事記載の善行表が送られましたので、これはこの俚反古にすべきでない。推賞と奨励とに勧むべきであると信じ、大正六年七月衆善雑誌第一号一千部を発行しました。

その後多い時には施本用に使用されて六千部増刷したこともありました」

- ・『衆善』の創刊：大正6年7月1日発行、全32頁。13本の記事（表1）
- ・山本滝之助がNo.2 論説「国民性と一日一善」を寄稿している。冒頭で「前きに御大典記念に、樋口師が一日一善を唱導せられ」とあるので、「一日一善」活動開始は大正天皇即位礼の大正4年11月以降。
- ・『山本滝之助日記』での琢堂に関わる記事の初見＝大正5年9月2日条「午前十時、京着、相国寺行」。大正6年7月条「京都樋口氏へ交渉のこと（京都市中講話）」
⇒山本が京都市内で講話を行うのに慈雲庵を会場にした。山本との信頼関係。
- ・No.8「鐘淵紡績会社の一善」：京都市外田中村の鐘紡支店で修養会が組織され、4月から男子800余名に琢堂が寄贈した日記を配布して「一日一善」を奨励した。善行表が提出されたので紹介。
⇒吉田武重「職服に大きな屑綿くずわたが付いた俣食堂に行く人があったので取ってやる」など11名19件の善行が記録されている。
- ・それ以外にも、No.4「女子師範学校の一善会」、No.5「名古屋電鉄の一善会」、No.6「市内各商店の一善」、No.7「廓の一善」（祇園町・先斗町）、No.9「郵便局の一善」。自らが「一日一善」日記を配布し、返信があった個人・団体の善行を紹介している
- ・No.11「如是観にょぜ」（編者あとがき）：「中に熱心に毎月必ず書いて御送り下さる御方が平均三十余名ありまして、各方面から隠れたる種々の社会公益及び自治精神きゆうこうの日記が参ります故（中略）、私の立場として是非実践躬行者（私の信徒です）を紹介する」
- ・No.12「趣旨及会則」：第二条「立派な共同生活をするには、『自治』即ち自分の事は自分にする、言換れば人が見ていようが見ていまいが、善い事はすると云う事を心に深く持たねばなりません」
⇒「自治」・修養の必要性を強調。
第七条：会費は一ヶ月5銭、半年分30銭、一年分50銭。毎月『衆善』送付。

4. 「一日一善」の広がり

1) 『衆善』の多彩な寄稿者

- ・政治家・実業家・学者・禅宗各宗派老師といった著名人や社会教育関係者が論説を寄稿している（表2、新渡戸稲造・大倉喜八郎・徳富蘇峰・平沼騏一郎らも寄稿）。
- ・最多は方広寺派管長間宮英宗の47本。巻頭論説は各宗派老師に依頼していた。創刊号の巻頭論説も間宮「一日一善」。禅の教理を踏まえた教化活動としての側面。
- ・注目すべきは寄稿数2位の石黒忠憲ただのり（写真8）。石黒は陸軍軍医制度の基礎を築いた医師。弘化2年（1845）生。明治4年（1871）に兵部省に出仕、西南戦争に従軍。明治23年（1890）陸軍軍医総監に就任し、日清・日露戦争において戦時衛生に大きな貢献を果たした。貴族院議員・枢密顧問官・日本赤十字社社長などを歴任した。昭和16年（1941）没。
⇒琢堂は、大正6年9月4日の乃木祭（京都の乃木神社か）で石黒に会い、「衆善」の揮毫（写真9）を依頼した（『衆』T07/04）。琢堂は、東京の石黒自宅を訪問し、赤十字社社長の功労を賞し貞明皇后から下賜金2000円を頂戴した話を聞いた（『衆』T07/11）。
- ・山本は石黒と懇意な関係にあった。山本の著書『地方青年』（国光社、1904年）の口絵に石黒は揮毫している。石黒と琢堂の間を介在したのは山本か。愛知県立農林学校長の

山本延吉、社会教育家の後藤静香は青年会の活動を通じて山本と親交があった【多仁2011】。琢堂の人脈形成は、山本の仲介によるところが大きかったのではないか。

- ・衆善会の会員には、大正天皇の生母である柳原愛子（写真10）も入っていた。柳原が京都を訪れた際に、相国寺派の旧尼門跡寺院大聖寺の尼僧であった祖琉尼（23世住職石野慈栄に仕える「若い人」【井之口等編1965】）から『衆善』を供されたことがきっかけとなり、柳原は琢堂と面会し、金2000疋を下賜した（『衆』T06/09）。

2) 会員の増加

- ・『衆善』には、会員の善行を促すために様々な工夫を凝らした記事が掲載された。
⇒「人生行路之図」（写真11、『衆』T09/08）：「人生行路元標」から「善道」・「悪道」に分かれており、「善道」は「安楽神社」・「貯蓄林」に、「悪道」は「破滅ヶ原」・「ヤケ糞田」に続いている。巻頭の附録絵葉書。
- ・「衆善維持会趣意書」（『衆』T07/05）：1口金20円の醸出を求める。「今や会員式千名に垂んとして偉大なる同情の結晶を得」⇒会員は2000名に増加。「編集室」（同上）では、編集発送などの作業をほとんど一人でこなしていると述べている。

3) 「一日一善」の実践

- ・毎号の「実行欄」に会員から提出された「一日一善日記」の善行が列挙された。大正7年8月号には32名の善行が掲載され、それぞれに琢堂はコメントを寄せた（写真12）。
⇒兵庫鐘紡職工学校竹下栄次郎の善行「街道に瓶の欠けが落ちてありしを、拾うて塵箱に入れました」に対して、「（評）若し君の目につかなかつたら、キット足を切て泣く子供があつたかも知れませぬ」。欄の冒頭には「毎月各方面より実行日記を送つて下されて、熱心なる誠意ある善行には涙に咽ぶ次第であります、なるべく皆載せたいのですけれども、紙面の都合で残念ながら御満足を与える訳に参りませぬ」とある。
- ・「一日一善」実行者で目立つのは鐘淵紡績（後のカネボウ）の社員たちである。
- ・「実行者名簿」（『衆』T07/01）＝大正5年1月から大正6年12月までに3ヵ月以上継続して「一日一善用紙」を記載し、琢堂に返送した者の名簿（表3）。
- ・鐘淵紡績は明治20年（1887）創業、当時日本最大の繊維製造会社。明治38年に共済保険（健康保険）制度を導入するなど家族的経営で知られた。京都工場は明治41年新設。日清戦争後に事業を拡大していた鐘淵紡績は、大正元年（1912）に「科学的操業法」、同四年に「精神的操業法」という労務方針を出し、作業の能率向上と「その仕事の内に誠意を籠めんこと」を社員に求めた【鐘紡株式会社1988】。
- ・京都支店では男工手の矯風会と女工手の婦人会が組織されていた。矯風会では勤務が優良な工員の表彰式が行われたが、冒頭で戊申詔書が読み上げられた（『衆』T07/02）。
⇒国策に調和する形式を取りながら企業活動の発展を目指していく方法。京都支店が社員に「一日一善日記」の活用を促したのも、業務に対しての「自発性」を求めていく点で有用と判断されたから。

4) 衆善会の諸活動

- ・衆善会本部として利用するため慈雲庵書院改築を発案（『衆』T09/12）。
⇒費用を得るために『古今禅林佳話集』を出版（写真13、全350頁）。百丈禅師の「一日不作一日不食」など、禅僧の逸話を148話掲載。「終に初版は瞬間に売尽されんとする有様」（『衆』T10/01）、「三版製本出来の運び」（『衆』T10/03）。

- ・6月に書院は竣工（『衆』T10/06）。書院改築決算報告（『衆』T10/11）
→収入7,773円50銭（内『古今禅林佳話集』収益が5,150円）、支出10,946円16銭。3,000円以上の赤字。補填のために『修養と日誌』（写真14）を出版する。

おわりに

- ・『衆善』は、琢堂が始めた「一日一善」活動の広報誌であった。この活動は、琢堂にとってまさに禅僧としての菩薩行であり、私財を投じて精力的に取り組んだ。
- ・しかし、仏教家としての信念だけが「一日一善」活動の動機付けになっていたのではなく、大正天皇との出会いが社会活動に邁進するきっかけとして琢堂の脳裏に刻み込まれていた。それは、教育勅語・戊申詔書によって天皇制の権威が社会に浸透していたためである。琢堂は、「自発的」に国家に貢献する人間を育てるという地方改良運動以来の国民教化政策に強い影響を受けていた。
- ・琢堂の「一日一善」活動は社会的広がりを見せており、全国から会員が集まるとともに、『衆善』には政財界の大物も寄稿した。
→山本滝之助が全国の青年団体活動に関わり得たことと同様に、政府の施策によって作り出された時流に乗った部分が大きかった。
- ・『衆善』と「一日一善」活動によって、琢堂は伝統仏教教団の殻を破る社会活動家として世間に知られていくことになる。そのことが、仏教界全体の動向と琢堂を関わらせることになった。

【参考文献】

- 熊谷辰治郎編『山本滝之助全集』（山本滝之助氏功労顕顕会、1931年）
井之口有一・堀井令以知・中井和子『尼門跡の言語生活の調査研究』（風間書房、1965年）
日本青年館『大日本青少年団史』（日本青年館、1970年）
宮地正人『日露戦後政治史の研究―帝国主義形成期の都市と農村―』（東京大学出版会、1973年）
平山和彦『青年集団史研究序説』（新泉社、1978年）
多仁照広編『山本滝之助日記 青年団活動史』3、（日本青年館、1987年）
鐘紡株式会社社史編纂室『鐘紡百年史』（鐘紡株式会社、1988年）
長志珠絵「青年団イデオログ山本滝之助に関する一考察」（『歴史評論』494、1991年）
多仁照広『山本滝之助の生涯と社会教育実践』（不二出版、2011年）

※引用史料については次のような処理を行っている。①適宜句読点を付した、②旧字体を新字体に改めた、③カタカナをひらがなに改めた、④一部の漢字をひらがなに改めた、⑤原文のルビは省略した、⑥難読の漢字には新たにルビを振った、⑦歴史的かな遣いを現代かな遣いに改めた、⑧漢字の送りがなを補った、⑨漢文の部分は読み下した。次回以降も同じ。



写真1 樋口琢堂(出典:『追想 病床に於て』)

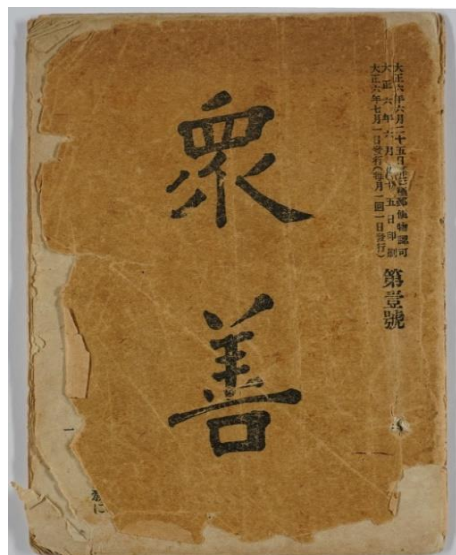


写真2 『衆善』創刊号

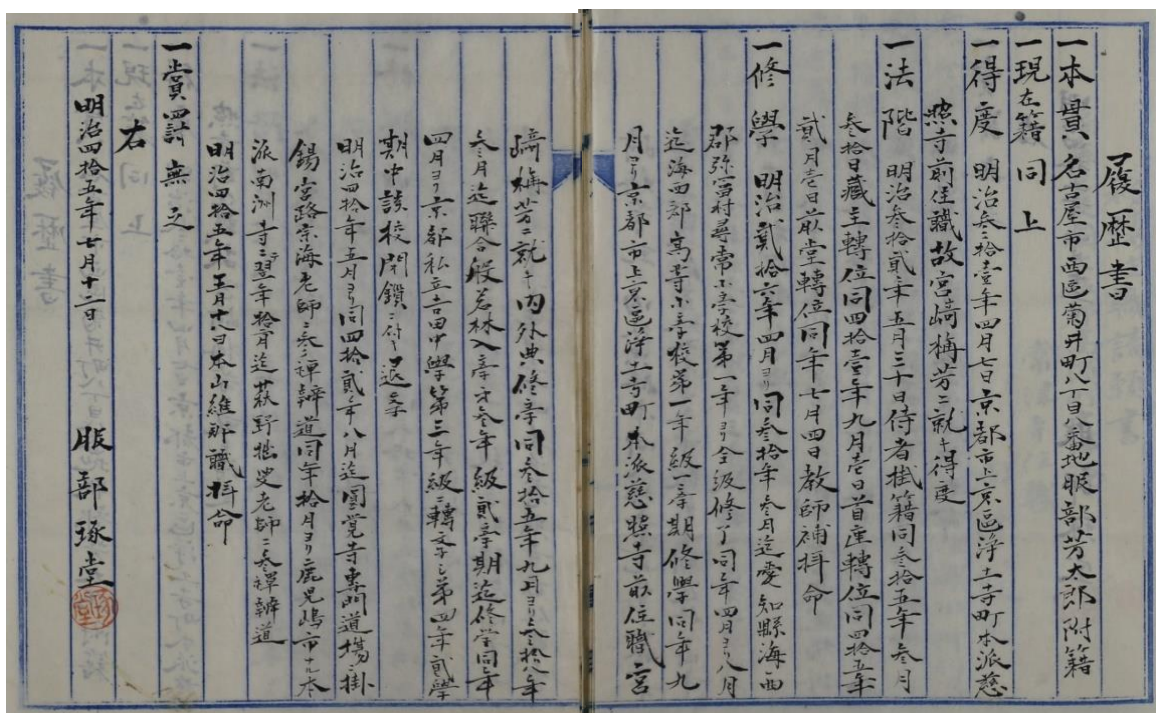


写真3 樋口琢堂履歴書(相国寺文書「住職」)

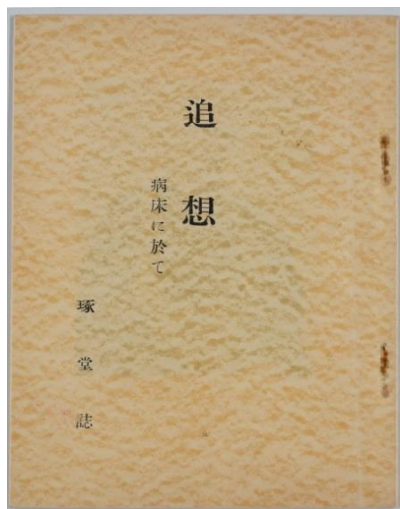


写真4 『追想 病床に於て』



写真5 山本滝之助
出典:熊谷辰次郎編『山本滝之助全集』
(山本滝之助氏功勞顕頌会、1931年)

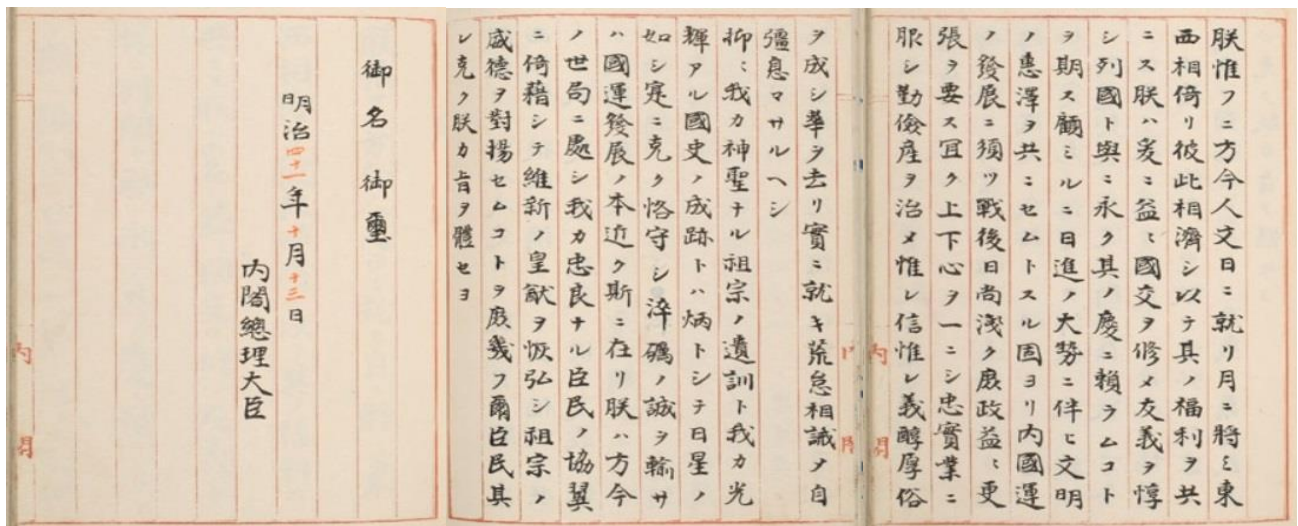


写真6 戊申詔書(出典:国立公文書館HP)

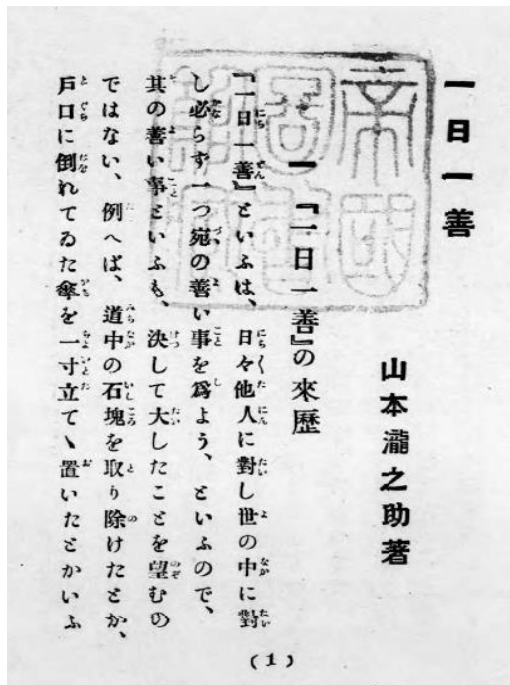


写真7 『一日一善』

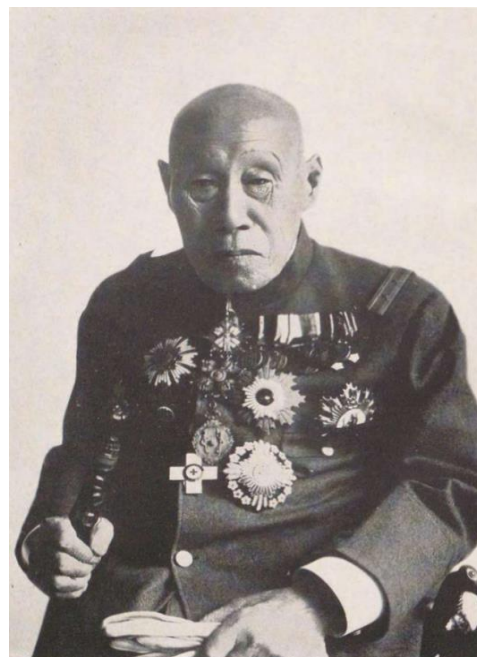


写真8 石黒忠恵
出典:石黒忠恵『懐旧九十年』(博文館、1936年)



写真9 石黒忠恵揮毫(『衆善』大正6年10月号)



写真10 柳原愛子
出典: 研谷紀夫編『皇族元勳と明治人のアルバム 写真師丸木利陽とその作品』
(吉川弘文館、2015年)

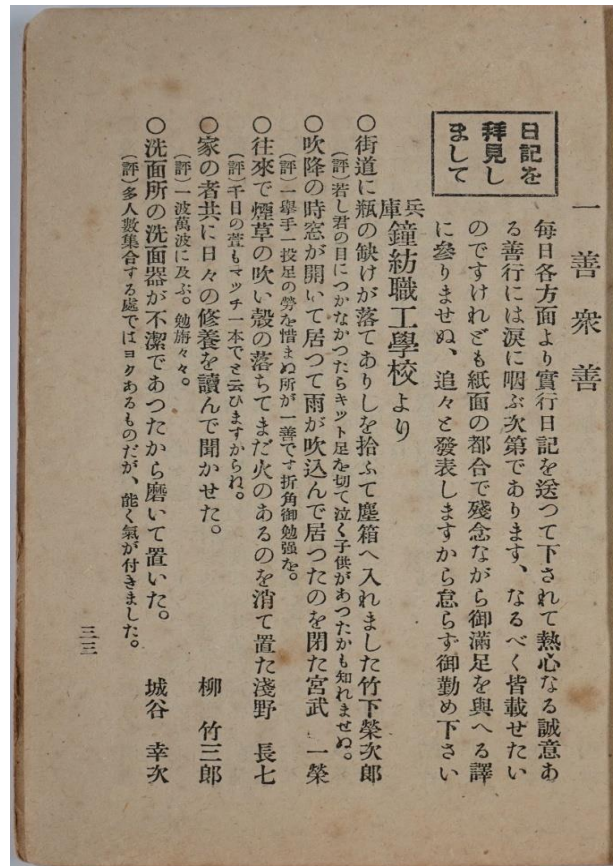


写真12 「実行欄」(『衆善』大正7年8月号)



写真11 「人生行路之図」(『衆善』大正9年8月号)

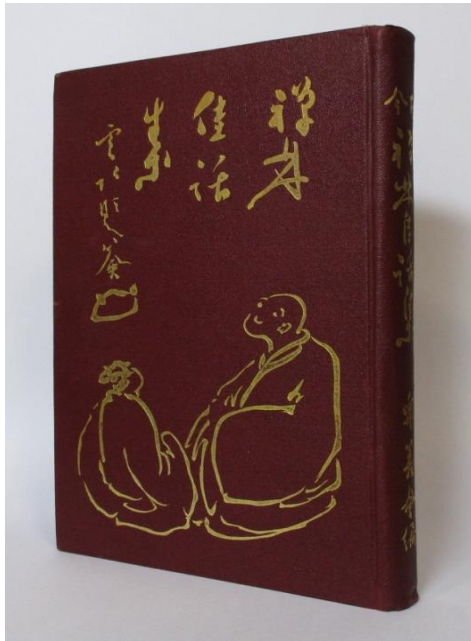


写真13 『禅林佳話集』

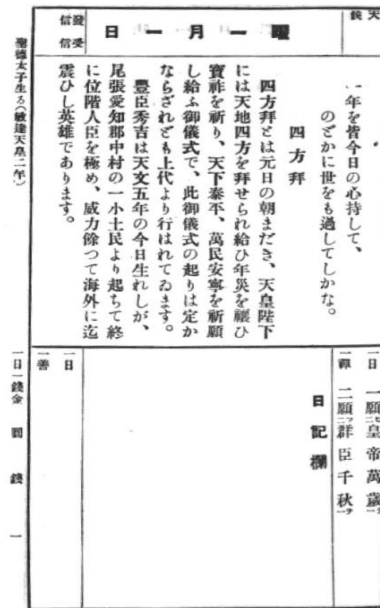


写真14 『修養と日誌』

表1 『衆善』創刊号の構成

No.	記事	執筆者	頁
1	一日一善	間宮英宗	1
2	国民性と一日一善	山本滝之助	4
3	英国の理諺		9
4	女子師範学校の一善会		9
5	名古屋電鉄の一善会		11
6	市内各商店の一善		14
7	廊の一善		18
8	鐘淵紡績会社の一善		19
9	郵便局の一善		24
10	和合の陀羅尼経		27
11	如是観	樋口琢堂	28
12	趣旨及会則		30
13	感謝欄		33

表3 「一日一善日記」用紙返送者人数

No.	所属	人数
1	鐘紡京都支店	43名
2	名古屋電鉄会社	31名
3	静岡浜名北浜村附近	22名
4	京都聖護院郵便局	13名
5	京都西堀惣糸工場(相国寺北門前)	10名
6	福島郡山寿泉堂病院	10名
7	京都小田佐洋酒商店(木屋町三条)	5名
8	京都宮本儀助商店(松原不明門)	4名
9	大阪の鰻谷ほとり	3名
10	福島郡山専売局	3名
11	広島	3名
12	京都井上信平商店(仏光寺鳥丸)	2名
13	京都常盤料理店(千本今出川)	2名
14	京都の廊	2名
15	朝鮮大田	1名
16	門司	1名
	計	155名

※『衆善』大正7年1月号

表2 大正年間の『衆善』における論説掲載者

	氏名	寄稿数	備考
1	間宮英宗	47本	方広寺派管長
2	石黒忠恵	28本	陸軍軍医総監、日本赤十字社社長
3	山本滝之助	20本	広島県沼隈郡立実業補習学校長
4	山崎延吉	18本	愛知県立農林学校長
5	渋沢栄一	14本	実業家、社会事業家
6	釈宗演	10本	円覚寺派管長
7	山下信義	9本	社会教育家
7	徳川達孝	9本	田安德川家当主、貴族院議員
7	加藤咄堂	9本	仏教学者
10	後藤静香	6本	社会教育家

※政治家・実業家・学者・禅宗老師・社会教育家であり、論説掲載数6本以上の者。『衆善』1号～114号まで。19号～25号、27号～29号、100号、108号は未収集。